

都筑の家

設計: 庄司寛建築設計事務所

風景と対応する建築

庄司 寛 | Hiroshi Shoji

敷地は、神奈川県横浜市の比較的若い世代が住み集う新興住宅地域の中にあり、市営地下鉄新駅に近い利便性の高い場所に位置している。大きくカーブする幅7.5mの道路に面し、敷地はそのカーブの内側に位置する三角形に近い変形地型の土地であった。環境として特筆すべきは、道路を挟み対岸に広がる既存樹木の密生した緑豊かな自然の森である。本計画では、既存の森が保有する豊かな自然の美しさを十分に享受するとともに、対峙する自然と呼吸・共鳴するような能動的な存在感を放つ建築を目指したいと考えた。

風景を取り込む

この建物は、南・東・北の3つの方向に跳ね出しの形状をつくり上げている2・3階のヴォ

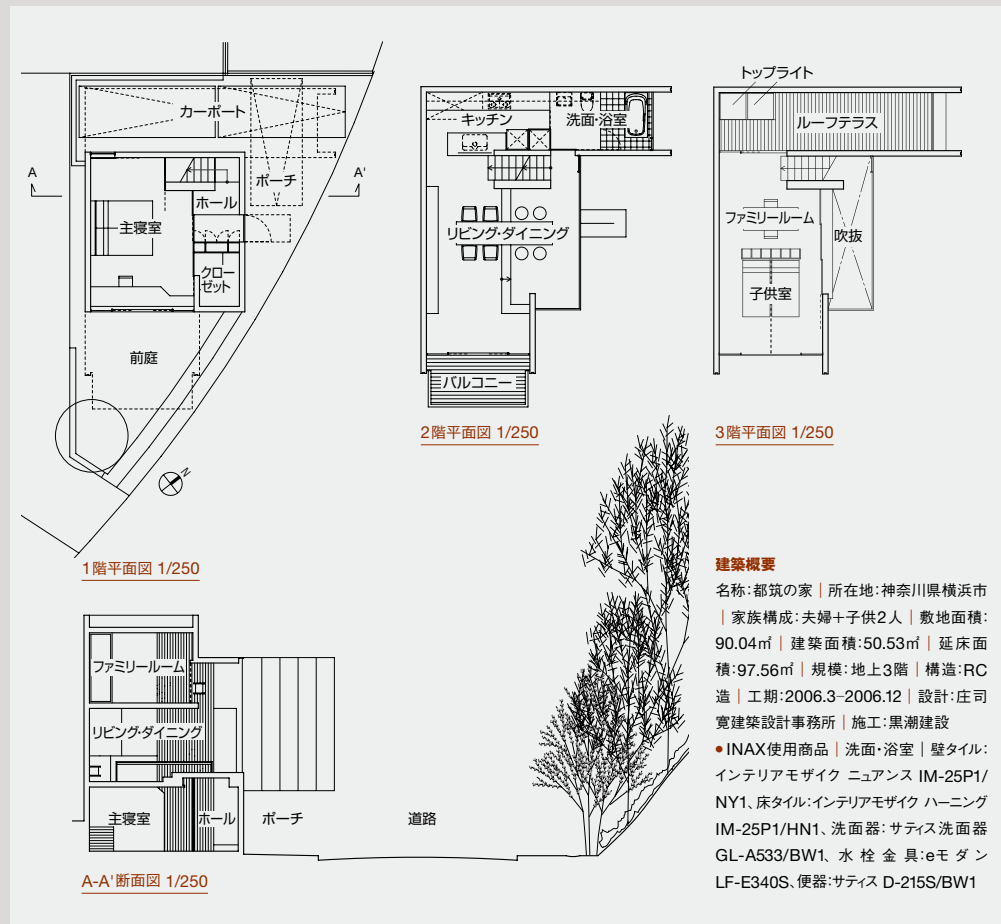
リュームが、5.1m角のキューブ状の1階部分によって支えられた構造フレームを呈している。生活の中心となるリビングを2階にプロگرامし、森に向かって大開口を設えることによって、道路からの視線を気にすることなく、プライバシーを保ちながら対岸の森の緑を存分に眺めることができる。2・3階の跳ね出し空間の創出によって具現化された壁は、直交方向に重なりながら、眼前に広がる自然の風景を切り取る存在となり、森との距離を縮め、その緑をより鮮明なイメージとして室内へと導き入れる。人は切り取られた森の風景の美しさを改めて認識し、四季折々に移ろいゆく自然の美しさを肌で感じることであろう。この住宅では、キッチン・洗面・浴室の水まわり空間が一直線に配置され、おのおのの空間を仕切るガラススクリーンを通してどの場所からでも跳ね出しの壁に沿って視線が森の緑へとつながっていく。また森への指向性を強調するエレメントとして、空間を貫くようにデザインされたコンクリートのカウンターと白いモザイクタイルの壁の存在が、さらに視線を森へと誘ってくれる。

風景を創造する

この建築の造形的特徴となっている跳ね出し状の壁の存在は、強く森とのつながりを表現するメタファーともなっている。大いなる自然というコンテクストに向き合う人工的造形物であるこの建築が、能動的な存在感を放つことにより、対峙する眼前の森の自然と呼吸・共鳴し、この場所に新しい風景をつくり上げていくであろうことを期待している。

しょうじひろし——建築家/1961年生まれ。
1984年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。
1984-86年、フォルム設計。
1986-2002年、ESPAD環境建築研究所取締役・パートナー歴任。
2002年、庄司寛建築設計事務所設立。
主な作品: 今市の家[2003]、
東京大学ユビキタス実証スペース[2005]、
二階堂の家[2005]、雄司が谷の家[2006]、
守谷の家[2008]など。

- 1——東面全景
 - 2——リビング・ダイニング
 - 3——キッチンから洗面・浴室を見る
 - 4——リビングから外を見る: 開口部には下から上に閉じていくハニカム形状のブラインドが設えてある
- [写真1,2,3: 石井雅義, 4: 新建築社写真部]



HOUSE & HOME
House in Tsuzuki

コトリノエ

設計:小泉アトリエ

着心地の良い住まい

小泉雅生 | Masao Koizumi

麓から、車もアクセスできないような狭くて急な山道を、時間にして10分、標高にして80mほど登ると、山頂に程近い敷地に辿り着く。途中ではリスや小鳥などの野生動物に遭遇し、都市近郊ということのを忘れさせる。敷地内には見上げるようなヤマザクラの古木がある。このような山深い場所にこの住居は計画された。

住宅においては、雨風や寒さ暑さといった気候変動から身を守るために、堅固な構築物が必要とされる。特に山深くラフな自然に囲まれた場所では、安心感を与えるべくしっかりとした外皮が求められる。そこで、まず“家”をシンプルな硬い外皮で覆う計画とした。

と同時に、山の中で自然に囲まれてゆったりと時を過ごすためには、開放的で身体やアクティビティにフィットするルーズさも重要だ。そこで、“硬い建築”と“柔らかい身体”の間を取り持つルーバー状の内皮を差し込むことで、身体を包み込む「着心地の良い空間」をつくり出すことを目指した。

内皮は細い木製フレームが連なってルーバー状になったものである。一見、構造材とは思えない小さな部材で構成されているが、小屋梁を支える構造体としての役割も果たしている。身体性を持った構造材である。

この内皮を構成するフレームは平面的に凹凸を繰り返し、壁を織り込むような形となっている。ルーバーの外側、すなわち内皮と外皮の間には、浴槽や洗面器やベッドルーム、取

納などが配されている。ルーバーの壁の形状は、これら諸室の機能を包み込むことで導き出されたものである。

ルーバーの内側、つまり内皮の内側は、チューブ状の一室空間となっている。外側の機能諸室によって導き出された空間の凹凸が、本を読んだり楽器を楽しんだり、といったさまざまなアクティビティのきっかけとなる。チューブ状の空間は、これらのアクティビティを包み込みながら両方向のテラスへと伸びていき、そして、最後は周囲の林に向かって開いていく。

ルーバーの隙間からは、その先の壁や天井が見通せる。夜間はルーバーの外側に光をためることにより、家全体がルーバー越しの明るい壁と天井で包まれる。すなわち、壁フコロや天井フコロが見えてくることで、奥行きが深い表情が生み出される。柔らかく包まれつつも、その先に意識が広がっていく空間である。なお、浴槽や洗面器などは、ルーバーの外側をできるだけ明るく見せるために、白い設備機器を用いた。

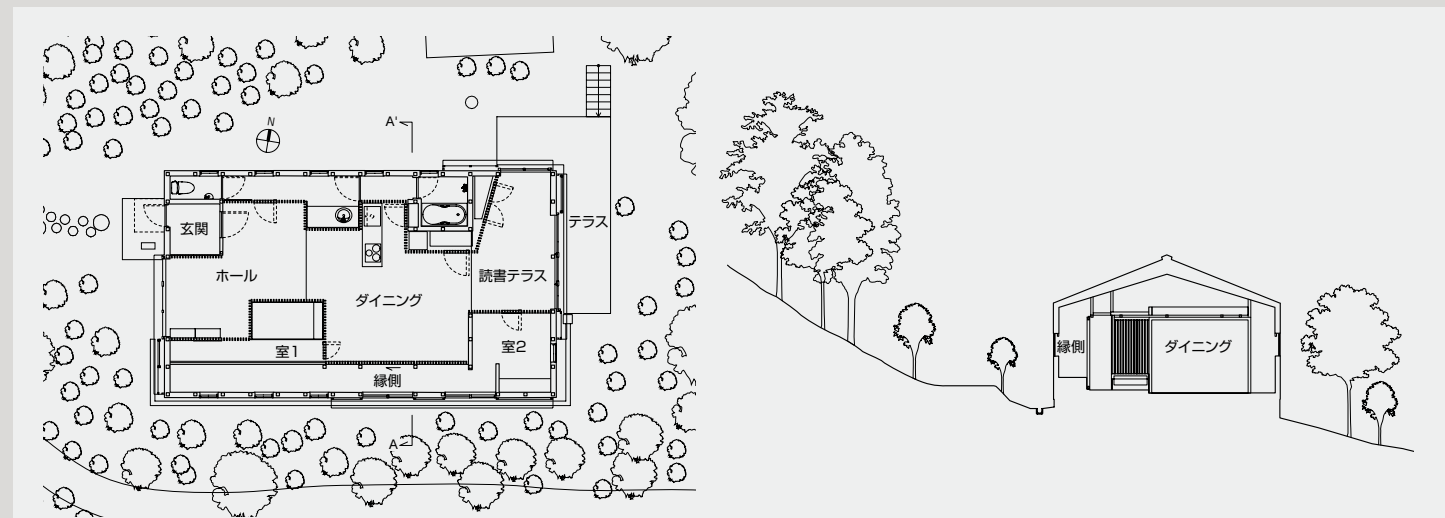
外部とつながるチューブ状の空間を内包するという構成は、人体の消化器官によく似ている。外皮と内皮という2つの次元の異なる建築的要素を組み合わせることによって、さまざまな機能とアクティビティを内包する、身体性を持った器がかたちづくられる。

こいずみまさお — 首都大学東京大学院都市環境学環建築学域准教授・小泉アトリエ主宰 / 1963年生まれ。
1986年、東京大学大学院在学中にシラカスを共同設立。
1988年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。
2001年、東京都立大学大学院助教授(現・首都大学東京大学院准教授)。2005年、小泉アトリエ設立。
主な作品:アスタノエ [2004]、埼玉県戸田市立芦原小学校 [2005]、千葉市美浜文化ホール・保健福祉センター [2007]、ENEOS創エネハウス [2009]、象の鼻パーク・象の鼻テラス [2009] など。

1 — ダイニング:ルーバーの奥は緑側 | 2 — 北面全景
3 — ホールからダイニングを見る:右のルーバーの奥はベッドルーム | 4 — トイレ | 5 — 浴室



HOUSE & HOME
bird-watcher's house



1階平面図 1/250

A-A'断面図 1/250

建築概要

名称:コトリノエ | 所在地:神奈川県逗子市 | 敷地面積:319.64㎡ | 建築面積:92.96㎡ | 延床面積:92.75㎡ | 規模:地上1階 | 構造:木造 | 工期:2007.10-2008.7 | 設計:小泉アトリエ | 施工:キクシマ
●INAX使用商品 | キッチン | 水栓:オールインワン浄水栓 JF-1450SX(JW) || トイレ | 便器:アメージュV便器 GBC-320PU、DT-V150UW、手洗い:AWL-33(S)-S、水栓金具:eモダン LF-E02、紙巻器:FKF-32F/C、タオル掛:FKF-11F/C || 浴室 | 床・壁タイル:ポリコンモザイク、バスタブ:アーバンシリーズ ZB-1510H、シャワー水栓:アステシア BF-7146TL